

# まえがき

即興小説トレーニング

[http://webken.info/live\\_writing/top.php](http://webken.info/live_writing/top.php)

これはサークル・ウェブサービス研究会の作成したサービスの一種である。

サービス側から提示されるお題に沿って、書き手側は制限時間内に即興で小説を書くというものだ。制限時間は、15分、30分、1時間、2時間の中から書き手側が指定できる。

即興小説！

書き手自身も何が書かれるか全く解らない小説というのは、それだけで面白いものではないか？ 普通の小説も大なり小なりそのようにできているものだが即興小説、特に15分即興となれば格別である。

題材は？ どんな文体になるのか？ 一体、何が書かれるのか？

それら諸々が、たった15分で全て決まってしまう。いや、僅か15分だけでしか決められないのだ。

いわば即興小説とは、その瞬間までこの世の誰ひとりとして考えていなかった小説である。

本誌に掲載している作品は全て、ランダムなお題と15分という制限時間のみで書かれた即興小説である。

著者は制限時間内でできるだけ文字数を増やそうとした。ページ数稼ぎという意味ではなく、手を休めずにひたすら書きまくる……できるだけ小説を遠くへ持っていかうとしたということだ。一本、例外はあるものの。

だから本誌に載っているのは妙ちくりんな作品ばかりだと思われる。著者は妙ちくりんであるほど良いと考えていたと言っていい。もっと言えば、イカれている作品を目指した。

実際にイカれている作品ができたかどうかはともかくとして、これら妙な作品群の妙な感じを楽しんで頂ければ幸いである。

# 目次

xxP. タイトル／お題

01. 未達／俺の罰
02. それは人の領分ではない／今の伝承
03. 見よ！ この力！／狡猾なエデン
04. ノー／僕の好きな凡人
05. 自由研究／愛と死の祖母
06. 上げないと下ろせない／忘れたい村
07. 謝罪の要不要／名前も知らない冤罪
08. 放たれたビーストは完全に成功するだろう／犬のオチ
09. ゴールの名は希望／すごい逃亡犯
10. 屈強なり／凜とした大地
11. 君は何が欲しい？／贖罪の自転車
12. タイトル：愛の女神は悲劇がお好き／熱い愛
13. ラバーソウル／フニャフニャの恋
14. Hello, somebody／マイナーなオンラインゲーム
15. その言葉は死神の一撃に等しい／愛と死のジジィ
16. モツから出る諸々／地獄の喜劇
17. ホップとステップは窓から／地獄凶器
18. 計算高さが冷静でない／君と闇
19. どうも聞いた話だが……。／小説家たちの夫
20. 出口はどちらですか／ワイルドな幻覚
21. 掘り起こせ（輪廻転生編）／隠された友人
22. ダンベリング／素人の死刑囚
23. 肉／冷たい内側
24. 世知辛い／苦し紛れの整形
25. 確率を上げるための探偵術／誰かは復讐
26. あれがあいつの必殺奥義だ／左の話
27. ビヨンド／どこかのぬるぬる
28. スカポンタン／清いぬるぬる
29. オォーン／阿修羅子犬
30. 鮭を求めて宇宙／ぐふふ、春雨

お題「狡猾なエデン」

## 見よ！ この力！

彼は早速、柵を装備した。顔面丸出しであるが彼にとっては問題ではない。重要なのは柵をブン回して職員的首をバチバチ打ち刎ねることである。チャリで近くの地方銀行に向かった。ちゃんと到着した。

「金を出せ！」

このセリフは適切である。何故なら彼は言つと同時に、ATMの4000円を下ろそうとしていたフリーターの首をぶった斬つたからだ。血が吹き出して天井をしどに濡らした。彼は思った。「しどどって何だ？」口に出してすらいた。「金を出せ！」すぐに自分の欲望に忠実となったのは、彼にしては賢い選択だったといえる。

「ヒュー」

「お助けー！」

職員やら客やらの反応は、音声的に、なんだか間抜けであった。尤も滝本には関係がないことなので取り敢えず首を刎ねた。「金を出せ！」バカの一つ覚えで放たれるセリフも、強力な柵のせいで言葉の暴力である。

「お助けー！」

職員は早速、金をカバンにぶん詰めて滝本に渡した。滝本は満足しない。柵の偉大なる力に酔いしれているので、金はともかくとして、柵を使いたがったのだ。

「金を出せ！」

この表現は不適切である。何故なら金はもう奪ったも同然であり、彼が欲していたのは柵の威力の顕現であり、スポンと飛んでいく首なのだ。

柵をひと振り、スポン。柵をふた振り、スポン。滝本は面白く

かつてない強力な柵を手に入れたので早速使いたいのだが、案がない。牧場の強化を行えばいいかと考えたが、生憎と滝本は牧場主ではなく、強化できない。しかし牧場というのはいい線いつているんじゃないのかと自画自賛した挙句のアイデアが、牧場主に貸すである。これもまたいけない。彼に牧場主の知り合いはひとりもないし、彼の知り合いにも牧場主の知り合いはいない。

では知り合いでない誰かに賃貸してはどうかと考えられるかといえはそうはいかない。滝本はアホウである。なので次の案は牧場の強化ではなく、肉体の強化となった。いや、これはやや不適切な表現といえる。つまり、滝本の肉体を増強するのではなく、単に攻撃力を上げるといふことだ。柵を武器としてブン回すことにより、滝本は強力無比な戦士と化する。

このアイデアに滝本は戦慄した。もうちょっとで失禁するところだった。

「これで俺も、地上最強ではないか！ 銀行を襲ってしまえば金でウハハハ！」

てたまらない。こんなに面白くていいのかしら。もちろん、世間的によくない。だが彼にとつては天国である。今、彼は天国を自らの力でなくして、柵の力で創り出しているのだ。創造主！

嫉妬するのは客のひとり、長山である。「あの野郎、見た目バカなクセにあんな武器を手に入れるだけでこんな圧倒的になりやがって……」  
と言う。わざわざ口に出している。しかし問題はない。滝本はバカな上に夢中なので気づかない。長山が背後から近づいてきているのにも気づかないし、柵を奪われても「あ！」と思うだけで、次の瞬間、スポーンである。

長山は勝ち誇った。

「今度は俺の天国だ！」

簡単に最強になれる柵は鬼だ。

お題「愛と死の祖母」

## 自由研究

ラブを何リットル埋め込めば死んだ祖母が生き返るのか。これが僕が小学三年生のときに課された夏休みの宿題だ。誰がそんな宿題を出したんだといえば学校の先生となるのだけど、まあ、テーマを決めたのは小学三年生の僕なので、当時何を考えてそんな決定、しかも困難極まりないだろうことが容易に想像されるような課題を選んだのか、不忠議である。

まあ、真相は分からない。そんな昔の自分なんて、赤の他人と大差ない。

ただ予想くらいはつく。夏休みに入る直前に祖母が亡くなったということもあるし、それから、当時のテレビドラマは僕の好きだった女優が主演していて、それが恋愛ものだったからだ。ラブなんて名詞を憶えていたのもそのせいなんだろう。

……意外と小学三年生のことを憶えているものだな、僕は。ともかく、僕は早速、ラブを集める必要があった。手っ取り早いのは、当時の僕が惚れていたクラスのみっちゃんから頂くことだ。みっちゃんは隣の家でもあったから、夏休みだろうと訪ねるのにわけない。惚れて

いたわりにわけないというのは平均的小学三年生にあるまじきことなのかどうか今の僕には判断つかないが、特に何かあったような記憶がないところを鑑みると、べつにわけなかったのだろう。みっちゃんはラブをくれたし、僕もそれを嬉々として水筒に入れて持ち帰ったという結果だけは憶えている。

もちろんそいつを祖母の埋まっているところに流し込んだのだが祖母は生き返らなかつた。量が不足していたということだ。僕は再びラブ集めに奔走した。次は従姉妹のつばきちゃんのところである。同じ県ではないという不幸は夏休みであるという幸せが相殺する。僕は勝手に財布を持ちだして電車に乗り込むと、勤と駅員の助けを借りて、500キロを移動した。これ、本当に僕か？ しかしつばきちゃんからたらふくラブをもらったのは憶えているので、まあ、僕といって差し支えないだろう。それに家に帰る前につばきちゃんの家泊まったことだって憶えている。これで日帰りだったら流石に奇妙だと思わざるを得ないが、一泊二日となれば現実的だ。つじつまが合う。

二度目のラブ注入によって祖母は生き返った。これには僕も大喜びだ。僕はおばあちゃん子だった。おばあちゃんの作ってくれるおはぎは美味いし、一緒にいく散歩も面白くはなかったけど楽しかった。もちろん、祖母復活のその時も、僕はおはぎをねだり散歩をねだった。おばあちゃんには応じてくれて、僕の夏休みは結果的に楽しいものになったのだ。夏休みが終わるとおばあちゃんはまた死んでしまったが、ラブの必要量は分かっていたので僕は悲しまなかつた。

今では祖母の遺体は墓の下に埋まっている。ちゃんと収まるところを見たから確かだ。

お題「名前も知らない冤罪」

## 謝罪の要不要

「口でなら何とでも言える。大切なのは行動だ。違うか？ ごめんだのすまないだのはこちら聞き飽きているんだ。さっさと取ったものを返すんだな。そうすれば許してやる」

こいつ、悪徳警官だ。俺が何も返せないことを分かっているながら執拗に要求している。そうすることが俺の心をいたぶれると理解しているのだ。サディスティックな男だ。それとも正義感がそうさせるのか？ 裁くのは法だけではない、人間もまた人間を裁くのだと……。それは越権を表してもいるぞ。

「すまない。俺には謝ることしかできないんだ。もちろん許してもらおうとは思っていない。僕は裁きを受けよう、罰を受けよう。逃げも隠れもしない。ただ償うだけだ」

「償う？ 償うというのは言葉を吐き散らかすことを言うのか？ 今、俺が指摘したよな。口では何とでも言えるんだよ」

アスファルトのざらついた地面が俺の顔にめり込んだ。冷たく硬い衝撃が突き抜ける。頭を抑えられたのだ。思い切り、地面に。警官というのは暴力的なものなのか？

「いいか、罪人は贖罪よりも先に為さねばならぬことがある。責任というものだ。責任を果たすということであり、責任を果たすとは損害を補償するということだ。簡単な話だ。ガキだつて分かる。お前はこんな体格にガキ以下の脳みそを積んでいるのか？」

首に力を込めて、少し頭を持ち上げる。何とかして喋る。

「だから、僕のしたことを補償なんてできないだろう？」

「できる！ 貴様がポケットの中から盗んだものを出すだけだ！」

ちよつと遠出したところで捕縛された俺のポケットに入っているナイフに血。ざわざわざわと夜道を歩いている俺に向かって飛びかかってきたのが警察で、俺は一気に覚悟を決める必要がある。やつぱり人殺しはマズかった？ その通り、マズい。俺はあっさりアスファルトに打ち据えられて身動きが取れない。どうやら背中に乗られているし、腕の関節にも痛み。逃げ場なしと相成る。

それから遠くからサイレンが聞こえてきて、どこから来たのか野次馬がゾロゾロ出てきて、街灯の光が俺の顔面に容赦無い制裁を浴びせる。こういうのも罰のひとつか？ 騒々しいのは嫌いだけど、耐えられないほどじゃない。恥じ入るのはたたくさんの人間が俺を見ていること、俺の顔を犯罪者として認識していること。

背中に乗っている警官が俺に追求する。「取ったものを出せ！」

無理な話だ。人間の命は一度切りと相場が決まっている。一度失われればもう戻ってこない。

「ごめんよ」だから俺が出すのは命ではなく謝罪である。「後悔していい」

お題「犬のオチ」

## 放たれたビーストは 完全に成功するだろう

天を仰ぎながら猛然と自転車飛ばしてもう転校してしまった愛しのあの子に向けて「好きなんだよ、バカヤロー」と叫んだ拳句にコケる青春を送ろうと自転車で跨ったところで自転車の運転ができないことに気がついた。これはカッコ悪い。この俺の青春がこんなところで挫折するなんてあってはならないことだ。

早急に代案が必要となる。好きなやつが転校してしまったというのはウソだが、転校してしまいそうという状態ではあるのだ。期限はあと一日で、それまでに何とかカッコのつく別れ方法論を確立せねばなるまい。学習とは常に先人を真似ることから始まる。俺は早速、青春百戦錬磨として一部地域で伝説となった兄貴に訊いてみることにした。

「そりゃあオメエ、まずは筋肉だろ。マッスル野郎になれば女なんてイチコロよ」

特に末尾に『よ』を力強く伸ばして発音した辺りに信頼性を感じられたのだが、生憎筋肉は一日で成らない。それは筋肉痛である。他にはないのだろうか。

「じゃあ、状況だな。必要なのは意外性というやつだ。パンを啜えて走ってくる女の子とぶつかるっていう典型的シチュがあるだろう？ 実在しているかどうかはともかくとして。あれは何を覚えてくれるかといえ

ば意外性の重要なんだ。女の子は遅刻しまいと一生懸命で、自分の走行を阻害しようとする外的因子の存在に気を巡らせない。そこに登場する男！ ぶつかるというアクシデント！ 芽生えそうで芽生えなかったが、結局芽生える恋！ 全てが青春である」

なるほど、一理ある。しかし悲しいかな、俺の今の状況は転校生がやってくる、ではなく、転校生として去っていく、だ。これでは愛しいあいつの、次の学校のロマンスではないか。そうではない。必要なのは今、この瞬間なのだ。

「まだるっこしいやつだな。そんなんだから非青春を過ごす中学生とか言われるのだ、愚か者め」

その名で呼ぶべきではない。断じて呼ぶべきではないのだよ、兄貴。「まあ、いい。俺も兄として適切な助言を与えなければならぬ立場にいるからな。そうだな……。こうなつたとおきの技だ。来る者は拒まず去る者は追わずという言葉が如何に古いかを貴様の経験に叩きこんでやろう。来い、ビースト！」

兄貴が呼んだのは獣という概念でも、実在する獣一般でもない。具体的ないっぴきの獣、我が家のドッグズの片割れ、柱のひとつ、犬のビーストである。

ビーストは「アン！」と鳴いて部屋に入ってきた。賢いことこの上ない。よくぞドアを開けられるものだ。

「古来より犬は人間の仲間である。そう、仲間。グループを作るとい

ことはそのまま生存率を上げることになり、逆にグループの縮小は自らの命を縮める結果に向かうというものだ。必要なのは逃さぬこと、グループの一員として生きてもらうことである。効果的なのは脅しだ。明日、女の子にビーストをけしかけろ」



お題「すごい逃亡犯」

## ゴールの名は希望

人類最速の男の名が欲しい。彼は決心した。必要なものは絶望的なほどのトレーニングと、希望に満ちた戦場である。彼のトレーニングは常軌を逸していた。走る以外の行為を全て否定し、まるでプログラムを書き換えられてしまったマシンのように走るといふトレーニング状態を維持した。休息ではなく栄養価を摂り、食事と称して水分を補給した。マッチョ。彼は確かにマッチョとスピードを手に入れつつあったし、実際、手に入れた。

「がんばれ！ 負けるな！」

女子マネージャーの精一杯の応援が彼に力を与えた。音というものは空気の振動であり縦波であり密度の変化であった。圧力がそこにあり、彼の身体を押しやりした。

彼は感謝していた。全ての栄養価と水分を補給してくれたのはマネージャーに他ならない。決戦の舞台にまだ立っていないが、立つ前に彼は感謝を示したかった。

「ここまでこれたのは貴方のお陰だ。ありがとう。このレースが終わったら、結婚しよう」

間違いはふたつあった。正しくは、間違いがひとつと誤りがひとつである。

まず、レースなどというものはない。あるのはただ、彼のスピードを大衆に魅せつける場、それだけである。

次に誤りというのは、マネージャーに感謝しようとした、感謝を表明しようとして音声を使おうとした、その心意気である。彼は忘れてはならなかったのだ。自分がもはや走るマシンであり、プログラムは走る以外を行わない無限ループ仕様であるということを。

びい。

これが、彼がマネージャーを轢き殺したときの音である。感謝は死という形で彼女にもたらされたのだ。この人間界が地獄であるならば死こそが人に残された最後の樂園なのではないか……地球上の誰かが信じている哲学が彼女にも適用されている可能性はないとはいえなかったが、まあ、きっとそんなことはないのだ、彼はがっかりした。

「俺はただありがとうと言いたかっただけなんだ！」

彼の動機に拘わらず、コーチは怒り狂った。

「俺のマネージャーを殺しやがって！」

警察は殺人犯を追うようにできているため、コーチの通報を受けると現場に馳せ参じた。

「殺人のことで」

「こいつが犯人だ！」

コーチは警察に、彼の履歴書を差し出した。警察は暗記し、推測し、直ちに現場から出発した。犯人を追うのだ。犯人の脚は警察史上最速に達していたが、警察自身はそのようなことを意識しない。必要なのは犯

人を捕獲するということであり、記録を更新するというのではないからだ。第一、更新したのは犯人のほうである。警察は関係がない。アクエリアスの一本すら、彼のトレーニング中に差し入れていないのだから。警察は車両を用いて彼を追跡した。彼はひたすら走った。走ることにできないなかつたのだ。やがて警察車両が彼に追いついた。

「生まれ！ 止まらんと撃つ！」

警告したのは、彼が加速したからだ。このままでは、先にゴールを奪われる。

お題「凜とした大地」

## 屈強なり

キリキリはやがてグルグルに変わり、俺は便所に駆け込むだろう。実際に駆け込むし、投下も行う。大根臭があるというのであれば籠もるに違いないが、そんなものはないので俺は一命を取り留める。便所から出て俺を心配してくれるのはもちろん愛しのエリーだが、しかし原因は君。

キリキリと胃が痛む理由を探っていくと、どうにも昨日食べた大根に原因があるのではないかと想いあたった。我が愛しのエリーは素晴らしい女性であり完璧でありありとあらゆる面において女神と区別がつかないようになってはいるはずなのだが、致命的なことに大根料理だけが苦手である。大根おろしという、もしも初対面で「ワタシ、料理上手なんだー☆ 特に大根おろしが得意だねっ☆」などと言われようものなら「アハハ、そいつは料理上手だ。俺はレトルトカレーを温めるのが得意だよ」と返した末に「何ボケたこと言ってるの？ 料理じゃねえだろ」と、道端で腐りかけているゲロを見るような目で蔑まされるレベルの大根調理でさえ、彼女は失敗する。

そして紛れもなく、俺は昨日の台所で大根を目撃している。にも拘わらず食卓に登った料理の中に大根らしきものはなかった。俺はてっきり大根を諦めたものだと思っていたのだが、真実は違ったらしい。大根を使わなかったのではなく、使われたことに気づかず、胃への侵入を許したということだ。

これは乱である。

「ごめんなさい、でもわたしが全て悪いんじゃないの。大根そのものにも原因があるのよ。あなた、この大根がどこで採れたものか知ってる？ 知らないでしょう？ わたしは知っているは。そこは北の大地。海を越え山を越え、海にクジラを臨むような大地の大根なのよ。その大地はわたしたち日本人とは全く馴染みのないところだわ。一年中氷が貼り、空気がキリキリと冷え、動物たちを凍えさせ、植物を選別するかのよう枯れさせるのよ。もちろん、人間はそんな大地を変えようとしたわ。ありとあらゆる科学的手法を導入して、快適で、しかも作物を採れるような場所にしようとして……。でも駄目だった。大地は大地で有り続けたのよ。何にも影響されず、あらゆる外的要因に打ち勝って、己を誇示し続けたの。わたしたちがこんなところでつまらないことを言い合っている間にも、あの大地は決して弛まず、自分自身を保持し続けているのよ。でも、大根だけは違った。大根だけが、その大地に根を張ったの。いわば大地を超える大根を、あなたは昨日の夜に食べたのよ。いい？ よく考えて？ あなたの胃壁は大地よりも強固なの？ 人間のあらゆる手段と知恵を退け続けている大地よりも？」

俺の腹痛は大地のせいになった。

お題「贖罪の自転車」

## 君は何が欲しい？

衝動のままに行動すると何が起きるかを試したところ真つ先に友人の家に直行して車庫を破壊、中に格納されたランボルギーニ・ディアブロを完璧なまでに無視して奥に這い寄り工具箱からペンチを取り出すと一目散にその場から姿を消す脱兎、表に回って玄関横が定位置となつてゐる友人の自転車のカギを自宅から持ってきたモンキーレンチで木っ端微塵に粉碎して自転車の主導権を奪取した上でサドルに跨つて猛然と駅前通りに突入、アツアツのたい焼き売りの屋台に並んでゐるヤクザ然としたグラサンパンチに乗り上げた挙句に叫ぶ放送禁止用語、見よ、今やヤクザ然は憤怒の形相と言わんばかりに顔面へと血管を走らせまくつておんどりやわんどりやと喚きちらすも俺の手に構えられるペンチとモンキーレンチの二工具流に唾然のち大音量による喚きのリピート。音声の实体は単なる空気の縦波である密度の変動であるからそんなパワーで俺を倒せるかと思つてか！とモンキーレンチを振るえば流石はヤクザ然、この程度の攻撃には慣れてゐるか難なく砂漠も第二の視覚・ペンチを失念しておりグラサンが吹っ飛んで同時に目と目の間の鼻

が始まつてゐるところが切れて血。ドボドボとはいかないなりにヤクザ然の血管の目立ち度合いが三倍か四倍くらいに膨らんだところで遙か後方からおんどりやわんどりやが聞こえ出して振り向けばやはりヤクザ然で俺の目ではふたつを区別することはできず、仕方なしに分身の術を使うというヤクザ然と対戦するという窮地に陥つた。未だ自転車で乗つてゐるということは余裕禪々ということであると勝手に判断した末に両者を同時に相手取る二工具流は無敵を世間にしらしめつつヤクザ然の本体も分身も完璧な金属音と共に地に打ち据えて俺が雄叫ぶウオオオ！ チャンピオンと言わざるを得ない。チャンピオンの頂点っぷりに衝動はついに鳴りを潜めて俺の正気は正しい行いを肉体に要求する。つまるところ逃亡の意思であつて、俺は友人の自転車で後ろを振り向かずには逃亡する。次の日になつてどうも友人を見かけないと思つて訪ねるとグラサンに攫われたと、冷静な父親からの情報があつて俺はふたたびたい焼きの屋台でヤクザ然を待ちぶせ、意識を刈り取らずにモンキーレンチを唸らせて友人の場所を聞き出している。オーケー。俺は強いしモンキーレンチもスパナもあるし囚われているという事務所へ突入してヤクザ然をバツタバツタとなぎ倒しつつラスボスであるところの和服オヤジを滅多打ちにして友人と共に夕焼けの中を帰宅。流石に悪いことをしたなと思つたのでヤクザに尾けられていた自転車に変わつてロードレーサーをあげるよ。

お題「熱い愛（必須要素Ⅱクリスマス爆破計画）」

## 愛の女神は悲劇がお好き

テロリズムの完成は爆発物を最後とする。田中氏は自分の名に恥じな

いようにダイナマイトを作り上げた。彼の青春全てをつぎ込みさえした。お陰で学校では常にバカにされ、歩くデモクラシー運動とまで言われた。言った側は、意味も解らずにそういう言葉を使った。言われた方も意味が解らなかつたのでバカにされているかどうか微妙なところだったが、過去の経験から鑑みて、罵詈雑言の一種だと判断した。そのときの怒り……一人をバカにしながらも己は順風満帆な学校生活を送っているということに対する妬み……デモクラシーの意味不明さに対する困惑……田中氏は全てをダイナマイトに込めた。

当然のことながら完成する。田中氏の頭脳は哀しいほどに天才であった。具体的にはダイナマイトを用いて、町のクリスマスを滅多クソにしてやろうという動機が哀しみのそれであった。

道具を揃えたのち、必要なのは情報だった。ダイナマイトを懐に忍ばせると町を歩き、建物の配置を観察し、どこにダイナマイトを埋め込むべきか。この検分によって彼の計画が成就するかどうかが決まると、彼自身、固く信じていた。道行くカップルの仲睦まじさを間近に見るとい

うのもある種の準備だった。彼の心には冷たい怒りが張り巡らされた。余りにも冷たいので雪が降り始めた。カップルたちは足を止めてロマンティックな台詞を口にさえした。ゲロゲロである。彼の決心は極まった。しかし世の中には神が存在する。彼は最後に自販機で温かいコーヒーを買い、公園のベンチでひとり飲もうとしていた。だが先客がいた。夕暮れを過ぎてイブの暗さになった時刻である。女性がひとり公園のベンチにいるというのは、可能性としてひとつしか思い当たらなかった。即ち待ち合わせである。ロマンティックは田中氏のコーヒータイムさえ奪おうというのか？

だが違った。田中氏は自慢の高強度眼鏡で彼女の顔を見た。彼女は泣いていたのだ。田中氏は不安に駆られた。待ち合わせではない可能性に思い至ったのだ。何かしてやらねばなるまい。彼はベンチに近づいた。

「お嬢さん、どうなさいましたか」

彼が差し出したコーヒーの温もりは彼女の心を溶かした。彼女は恋人に振られたところだったのだ。彼女は泣きながらコーヒーを飲みながらゆっくりと前の彼氏に対する想いを見ず知らずの田中氏に打ち明けていったのだ。

「でも、わたしも、吹っ切れないといけませんね」

そうして笑ったのだ。田中氏は心打たれた。神は存在したのだと、生まれて初めて信じた。運命を求めた。

「僕も、独り身です。よろしければ、今晚、食事にも……」

彼女は再び笑った。さっきの微笑とは違う、花のような、笑顔だった。

「ありがとう」

田中氏は恋心をついに理解した。身の裡にかつてない情熱の炎が灯さ

れたのだ。それは即座に彼の心で激しく燃え盛り、激しすぎてダイナマイトに引火した。

お題「マイナーなオンラインゲーム」

## Hello, somebody

これはちょっと人に言えない趣味なのだが、サラバダスティ・ダンジョンというオンラインゲームにハマってしまった。受験生としてはこの時点で大学への道が閉ざされたといつても過言ではないのだが、サラダンの場合は過言になる。理由はといえば至極単純な話で、あまりにもマイナーなオンゲだからだ。これは何も俺の思い込み、妄想の類でマイナーだと言っているわけではなくて、現実に人がいない。サーバ自体は五台ほど用意されているものの、ログインしている人数が一台あたりで三人。俺を除けば僅かにふたり。他のサーバはどうかと覗いてみれば、むしろ三人は多いほうで、一人とか二人ばかり。五台目についてはゼロである。これをマイナー以外の形容詞に当てはめようというのであれば、ゴーストとかルーインとかの単語しか思いつかないほど。運営側もどうしてひとつのサーバに全員を集めないのか。過疎など遙か後方の出来事で、もはや空虚というに相応しい広大なダンジョンが常に俺の眼前に広がっているのだった。

なので普通のMMORPGのような楽しみはここにない。あるのはただ、NPCさえない無人の町、海のような森林、夜にさえ届きそうな

ほどの山、決して行けない彼方の風景。俺のキャラは有象無象の雑魚敵どもを蹴散らしてけなしのアイテムを拾い、ただ修行僧のように精進して、歩き続けるのみである。自分でもこんなゲームをやっている意味が分からない。

ただ、極稀に人間と出会うときがある。人間というか、正しくは自分以外の人間キャラなのだが。

「やあ」

「やあ、向こうの山にレアアイテムみたいなものを見つけたんだけどね。敵が強くて僕だけじゃどうすることもできないんだ。パーティを組むかい？」

俺はディスプレイの前でガッツポーズを組んだりはしない。こいつはNPCだからだ。貴重といえば貴重な存在だけど見つけたからといって何かあるわけでもない。表示された選択肢にNoを突きつけて、けどとりあえず、向こうの山とかいうダンジョンに潜る。レアアイテムに心を動かされたわけでも、強い敵が楽しみだったわけでもない。ただ、こういうNPCが指図した先にプレイヤーのいる可能性が少しだけ高いというだけだ。山で遭難したら頂上に向かえばいい、登山道と合流できるから——というのと同じ理屈。

実際、やってきてみれば雑魚敵に囲まれているキャラクターがひとり。なんだかやたらめったら一方的なダメージを受けているみたいなので助けてやる。

「助けるよ」

「Thank you so much」

おっと、こいつはプレイヤーだ。この広い世界で、まさに稀有な俺じ

やない人間。ただフォントが化けてるってことは、どっか良く解らない言語を使っている誰かなんだろうな。それでも人間がいるのはうれしいけど。